宮城・三輪田（みわだ）遺跡

1　所在地　宮城県古川市長岡字三輪田

2　調査期間　第二次調査　一九九七年（平9）五月～九月

3　発掘機関　古川市教育委員会

4　調査担当者　鈴木勝彦・佐藤　優・大本麻美

5　遺跡の種類　城柵官衙・寺院跡

6　遺跡の年代　飛鳥・奈良・平安時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

三輪田遺跡は、大崎平野を南側に望む長岡丘陵の南端部に、丘陵部と沢を取り囲むように立地する。遺跡の東側に隣接する七世紀末～九世紀頃の官衙跡と考えられている権現山遺跡では、掘立柱建物・塀などを多数検出し関東系土師器が多量に出土している。また、西側には八世紀～一〇世紀初頭頃の最大級の城柵として知られる、国指定史跡宮沢遺跡が隣接する。

三輪田遺跡の第一次調査は、一九七八年に実施し、ロクロ挽き重弧文軒平瓦や偏行唐草文軒平瓦の古瓦が多量に出土した。この調査では古瓦が伴う遺構は確認されなかったものの、ロクロ挽き重弧文軒平瓦が出土したことで、多賀城創建以前の古瓦を伴う施設の存在が明らかとなり、寺院の存在の可能性が指摘された（古川市教育委員会『三輪田遺跡』一九八〇年）。

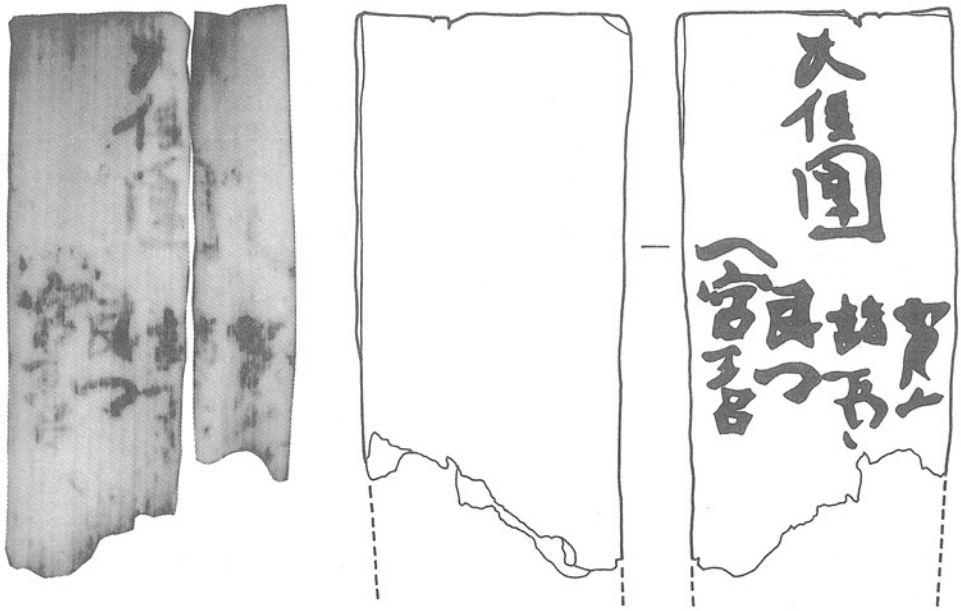
今回の第二次調査地点は、第一次調査の北側約一〇〇mにあたり、掘立柱建物、塀、竪穴住居、溝などを検出した。これらの年代は、七世紀末～九世紀頃である。

木簡は、三号溝から出土した。この溝は上幅約二・五mで東西方向に約四五m分を検出した。最下層には植物遺体を含む黒色粘土層があり、その上を地山ブロックを含む黒色粘土の人為堆積層が覆っている。木簡は人為堆積層から出土しており、共伴する土器から、八世紀前半頃のものと考えられる（関係文献参照）。

今回の調査では、古瓦の出土が少なく、検出した遺構の構成や後述する木簡の内容も、寺院というよりは城柵官衙的なものである。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「〔大住カ〕□□団　□□諸万呂　□マ宮万呂」　(91)×47×3　019



赤外線写真

上端は方頭、下端は折損している。墨痕は不鮮明で、赤外線テレビカメラ装置により一三文字が観察できる。上段に相模国の軍団名「大住団」を記し、その下段に四行書きで人名を記していると考えられる。四人めの「宮万呂」の上には、合点状の墨痕がある。

今回出土した木簡は、当時の大崎地方に他国の軍団兵士が駐屯していたことを示し、なおかつ付近に城柵官衙が存在することが推定され、古代の陸奥国経営を知る上で注目される。

なお、木簡の釈読にあたっては、東北大学の今泉隆雄氏、宮城県多賀城跡調査研究所の佐藤和彦氏からご教示を得た。

9　関係文献

古川市教育委員会「三輪田遺跡―平成九年度発掘調査概要」（『第二四回古代城柵官衙検討会資料』　一九九八年）

（鈴木勝彦）